

小学生の保護者は小学校英語を担当する教員に
どのような資質・能力を求めているか

What attributes and abilities do parents of elementary school
students expect of elementary English teachers in Japan?

川崎 由花・澤山 郁夫

兵庫教育大学

Yuka KAWASAKI, Ikuo SAWAYAMA

Hyogo University of Teacher Education

Abstract

This study investigated the attributes and abilities Japanese parents of elementary school students expect of elementary school teacher as English language instruction increased to twice a week in the upper grades of elementary schools in Japan from the 2020 academic year. The results showed that parents' ($n = 611$, 52.5% females) primary expectation involved proper pronunciation. The ability to pronounce properly and to communicate with ALTs was especially important for female parents. Additionally, items related to personality aptitude—such as “cheerful” and “positive attitude” as well as teaching aptitude, such as “willingness to cooperate with other teachers”—were also rated relatively high. If the needs of parents are to be respected, training protocols for elementary school English teachers should be revised to emphasize these qualities and abilities in the future. It is noteworthy that the overall mean value of the scores for “Level 1 of the English Proficiency Test, TOEFL 550, TOEIC 730 or higher” was the lowest among 34 items. This suggests that parents are less concerned with English proficiency than pronunciation, which may reduce the anxiety and burden on elementary school teachers who are not confident in their English skills. Based on these results, it is expected that an effective training system will be developed in the future.

1. はじめに

2020年度より小学校第5・6学年で週2コマ（年間70単位時間）の教科「外国語（英語）」が始まった。これに先立って、小学校では2011年度より第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化され、領域としての英語教育が実施されてきた。その後、2020年度の教科化に向けて、2018・2019年

度は移行期間として位置づけられ、多くの学校が年間時数を増やして2020年度全面実施に対する準備を行ってきたことは言うまでもないであろう。

このように、近年、小学校における英語教育の実情は大きく変化をしてきた。ベネッセ教育総合研究所・朝日新聞社(2018)は「学校教育に対する保護者の意識調査」において、学校に対する総合的な内容を問う質問項目の調査結果を報告するとともに、小学校英語教育改革に照準を合わせた保護者の意識についても報告をしている。全国の公立の小2生・小5生、中2生をもつ保護者7,400名(内、小学校保護者4,385名)を対象に、質問紙調査を行った結果、「学校の英語教育を充実させたり、4技能(聞く・読む・話す・書く)のすべてを評価する大学入試に変えたりする改革が進んでいることを知っていますか。」という問いに対して、小学生の保護者は「よく知っている」、「まあ知っている」を合わせて37.6%と4割を下回った。しかしながら、小学校での英語学習実施に対しては89%が賛成であり、「英語教育の改革によって、お子様の英語学習に今まで以上に力を入れなければならないと感じますか。」(傍点筆者ら)との問いに対しては、「とても感じる」と「まあ感じる」を合わせると82.2%であった。この結果から、保護者の英語学習に対する関心の高さがうかがえると同時に、質問項目の「今まで以上に」という表現に着目すると、現在の英語教育が必ずしも十分ではない、また、将来的には現在の英語教育以上の教育を期待しているとも解釈できよう。

では、2020年度から実施される教科としての「外国語(英語)」を担当する教員(以後、小学校英語担当教員とする)にはどのような資質・能力が求められるのであろうか。文部科学省(2016)は、小学校英語担当教員の資質・能力として、英語の基本的な技能、英語を指導するための能力を身に付けていること等の基本的な要件を示している(表1参照、下線筆者ら)。

表1 文部科学省(2016)が示す小学校英語担当教員の資質・能力

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ● 学級担任及び担当教員は、 <u>英語の基本的な技能、英語を指導するための能力を身に付けることが求められる。</u> |
| ● 英語の基本的な技能としては、例えば、 <u>身近な生活・文化関係の語彙、基本的な文法などが考えられる。</u> |
| ● 英語を指導するための能力としては、例えば、 <u>小学校の英語活動への理解、所定の教材の活用方法や指導方法などが考えられる。</u> |
| ● 英語の基本的な技能を身に付けるための研修としては、小学校教員が高等学校段階までに学習した英語の基本的な技能の保有状況を確認しつつ、 <u>既に獲得している語彙や既に身に付けている文法事項等の再習得、身近な生活・文化関係の語彙の習得、音声を含む基本的な英語運用技能の習得などが考えられる。</u> |
| ● 英語を指導するための能力を身に付けるための研修としては、 <u>小学校の英語活動に関する教育法、校内研修等での模擬授業などが考えられる。</u> |

一方、保護者は小学校英語担当教員の資質・能力についてどのように考えているのであろうか。学校教育に対する保護者の教育意識に関する研究は、教育社会学や教育経営学を中心に分野横断的な研

究がなされ、数多くの研究報告が蓄積されている(山本, 2015)。保護者と学校の連携阻害に関する研究(例えば, 仲田, 2009)や, 保護者と学校との連携促進に軸足を置いた研究など(例えば, 岩永・芝山・橋本・岩城, 2015), 様々なアプローチでの研究が進められている。

保護者と学校, あるいは, 教師との関係性について論じた先行研究は数多く見られるものの, 保護者のニーズという観点からボトムアップ的に小学校英語担当教員の資質・能力を検討する研究は筆者らの知る限り見当たらない。学校教育と家庭教育を車の両輪と捉え, 互いに信頼関係を構築し, 協力しながら子どもを育てていくためには, 保護者のニーズに応じた教員を養成していくことも重要と考えられる。そこで本研究は, 小学生の子どもをもつ保護者を対象としたアンケート調査から, 保護者が小学校英語担当教員に求める資質・能力について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査時期と回答者

2018年3月に, 楽天リサーチ株式会社の保有する30歳以上のモニターのうち, 回答時点で小学生の子どもをもつ保護者を対象に, 「英語教育に関する調査」と題してインターネット上で回答依頼を行った。参加者は, 後述する調査項目への回答の前に, まず, 個人情報保護方針等への同意が求められた。同意が得られた場合のみ, スクリーニング調査として, 小学生の子どもがいるか否かと, その子どもの学年および性別が問われた。もし, 小学生の子どもが複数人いる場合は, そのうち最も学年が上の子どもについての回答が求められた。回答データの収集は, 子どもの学年(低学年・中学年・高学年), 性別(男児・女児), および保護者の性別(男性, 女性)の組合せ(12通り)のそれぞれに対して, 均等の回収上限数を設けた回収ボックスを設定した上で, トータルサンプルサイズが $n=500$ を上回るまで行われる仕様であった。なお, データの質を担保するために, 回答開始から終了までのスピードの速すぎる回答者等については, 納品前のデータクリーニングとして, 楽天リサーチによって納品データから除外される仕様であった。

2.2 調査項目

調査項目としては, 高木(2012)が整理した英語教員としての資質・能力(計34項目)を用いた(具体的な質問項目文は表3参照)。高木(2012)によれば, 英語教員としての資質・能力は, (1)英語教員に限らずすべての教員が備えるべき「教職としての資質・能力」および, (2)「英語教員特有の資質・能力」の2つから構成される。さらに前者の能力は, (a)変わりゆく学校環境や多様な背景をもつ生徒に柔軟に対応していくために必要な「人格・性格の適性」, および(b)教職を生涯の仕事として全うするために必要な「教職としての適性」から構成される。また, 後者の能力は(c)「英語(運用)力」, および(d)4種類の「英語教授力」から構成される(表2参照)。これらの資質・能力について, 理想的な小学校英語担当教員が備えている程度を問うた。質問文は, 「2020年度から, 小学校高学年で週2コマの教科「外国語(英語)」が始まる見込みです。あなたの考える理想的な小学校の先生(5・6年生を対象に週2コマの「外国語(英語)」を担当する)は, 以下の項目についてそれぞれどの程度あてはまりますか。」とし, 0(全くあてはまらない)~6(非常にあてはまる)の7件法で回答を求めた。

表2 高木(2012)による英語教員としての資質・能力の枠組み

(1) 教職としての資質・能力	(a) 人格・性格の適性	
	(b) 教職としての適性	
	(c) 英語(運用)力	
(2) 英語教員特有の資質・能力	(d) 英語教授力	①学習指導に関する技術
		②学習者に関する知識
		③英語教授に関する知識
		④国際理解教育に関する知識

3. 結果と考察

結果、計611名(男性:290名,女性:321名)の保護者からの有効な回答が得られた。回答者の平均年齢は41.87歳(標準偏差5.71歳)であった。このうち、男子の保護者は305名(小1:49名,小2:46名,小3:50名,小4:54名,小5:55名,小6:51名)、女子の保護者は306名(小1:45名,58名,小3:52名,小4:49名,小5:54名,小6:48名)であった。

まず、全体傾向および保護者の属性別の分析結果について把握するため、保護者の性別(男性,女性の2水準)および年齢層(回答者の年齢中央値42歳以下の若年の層,42歳より高齢の層の2水準)を被験者間要因、資質・能力(34水準)を被験者内要因とする3要因混合計画の分散分析を行った。

以降ではまず、資質・能力の主効果についてみることで回答結果の全体傾向について把握し、その後、各属性要因に関する主効果や資質・能力との交互作用効果をみることで、保護者の属性別傾向を検討していく。

3.1 全体傾向

まず、資質・能力の主効果が検出され、資質・能力によって平均値は異なっていた($F(33, 20130) = 69.20, p = .000, \eta_p^2 = .10$)。多重比較の結果は、561水準対にのぼるため紙面の都合上省略するが、評定平均値の高い上位5項目は、平均値の高い順に、「明るい」($M = 5.28, SE = .05$)、「説明や指示を明確にできる」($M = 5.25, SE = .05$)、「教科書などを適切な発音で読める」($M = 5.22, SE = .05$)、「わかりやすい授業が展開できる」($M = 5.12, SE = .07$)、「他の教員と連携できる協調性がある」($M = 5.10, SE = .05$)であった。一方、下位5項目は、平均値の低い順に、「英検準1級, TOEFL550, TOEIC730以上である」($M = 3.86, SE = .07$)、「大学入試センター試験の英語問題に正確な解答が出せる」($M = 4.16, SE = .06$)、「国際情勢に関する知識と教養がある」($M = 4.32, SE = .06$)、「英語圏文化の背景知識がある」($M = 4.40, SE = .06$)、「異文化コミュニケーションの知識がある」($M = 4.45, SE = .07$)であった(表3参照)。すなわち、保護者は、小学校英語担当教員の英語力として「適切な発音で読める」ことは極めて重視しているものの、その他の英語に関する知識や教養についてはさほど重視しているわけではなかった。したがって、保護者のニーズを尊重するならば、小学校英語担当教員が適切な発音ができる状態であるかの確認や、適切な発音ができるようになるための研修体制の構築が求められるといえる。

3.2 保護者の属性別の分析結果

次に、保護者の属性によって、これらの回答結果に違いが認められるか否かを検討するために、属性要因に関する主効果や資質・能力との交互作用効果をみていく。

まず、性別の主効果が認められ ($F(1, 607)=6.00, p=.015, \eta_p^2 = .01$)、男性の保護者よりも女性の保護者の方が、平均値が高かった。また、性別と資質・能力の交互作用が有意傾向であった ($F(33, 20031)=1.44, p=.051, \eta_p^2 = .00$)。すなわち、資質・能力によって、保護者の性差の程度は異なる傾向であった。有意傾向であり、その効果量は小さいことに留意する必要があるものの、参考までに、どの資質・能力においてとくに性差が大きいのかを検討するため、項目別に性別の単純効果の検定を加えた。結果、有意な性差が認められた上位5項目は、効果量の大きい順に、「ALT とコミュニケーションができる」($p=.000, \eta_p^2 = .03$)、「他の教員と連携できる協調性がある」($p=.000, \eta_p^2 = .02$)、「教科書などを適切な発音で読める」($p=.001, \eta_p^2 = .02$)、「説明や指示を明確にできる」($p=.002, \eta_p^2 = .02$)、「プラス志向である」($p=.002, \eta_p^2 = .02$)であり(表3参照)、いずれの資質・能力についても、男性の保護者よりも女性の保護者の方が、平均値が高かった。すなわち、とくに女性の保護者において、小学校英語担当教員に対して、発音やコミュニケーションといった(c)英語(運用)力の要求水準が高かった。また、有意な性差が認められた項目には、「プラス志向である」といった(a)人格・性格の適性に関する項目や、「他の教員と連携できる協調性がある」等の(b)教職としての適性が含まれていることから、女性の保護者は小学校英語担当教員に対して、英語教員に限らずすべての教員が備えるべき「(1)教職としての資質・能力」についても高い水準を求めているといえる。

同様に、年齢層要因の結果についてもみていく。年齢層の主効果も認められ ($F(1, 607)=8.36, p=.004, \eta_p^2 = .01$)、若年層の保護者よりも高齢層の保護者の方が、平均的に評定平均値が高かった。また、年齢層と資質・能力の交互作用が有意であった ($F(33, 20031)=2.33, p=.000, \eta_p^2 = .00$)。すなわち、資質・能力によって、保護者の年齢層の影響は異なっていた。その効果量は小さいことに留意する必要があるものの、参考までに、どの資質・能力においてとくに年齢層の違いが大きいのかを検討するため、項目別に年齢層の単純効果の検定を加えた。結果、有意な年齢層の影響が認められた上位5項目は、効果量の大きい順に、「わかりやすい授業が展開できる」($p=.001, \eta_p^2 = .02$)、「生徒のニーズを分析し、授業の計画に役立てることができる」($p=.001, \eta_p^2 = .02$)、「説明や指示を明確にできる」($p=.003, \eta_p^2 = .02$)、「国際語としての英語の役割を認識している」($p=.003, \eta_p^2 = .01$)、「異文化コミュニケーションの知識がある」($p=.004, \eta_p^2 = .01$)であり(表3参照)、いずれの資質・能力についても、若年層の保護者よりも高齢層の保護者の方が、平均値が高かった。すなわち、高齢層の保護者においては、若年層の保護者と比べると、小学校英語担当教員に対する(d)英語教授力の要求水準が高いといえる。ただし、高齢層の保護者においても、評定平均値の上位5項目は、依然として全体平均と同様の傾向を示していることから(「説明や指示を明確にできる」($M=5.27, SE=.07$)、「明るい」($M=5.27, SE=.06$)、「わかりやすい授業が展開できる」($M=5.27, SE=.09$)、「教科書などを適切な発音で読める」($M=5.27, SE=.07$)、「他の教員と連携できる協調性がある」($M=5.27, SE=.07$))、高齢層の保護者は、(d)英語教授力を重視しているというよりもむしろ、軽視はしていないという解釈が妥当と考えられる。

概して、小学校英語担当教員の(c)英語(運用)力としては、保護者の属性に関わらず、「教科書などを適切な発音で読める」ことが突出して求められていることが明らかとなった。

表3 各項目の評定平均値および保護者の属性別の分析結果 (全体平均の高い順)

番号	区分	質問項目文	全体	男性	女性	性差の	若年層	高齢層	年齢層の
			平均 <i>n</i> =611	平均 <i>n</i> =290	平均 <i>n</i> =321	効果量 η_p^2	平均 <i>n</i> =275	平均 <i>n</i> =336	効果量 η_p^2
3.	(a)	明るい	5.28	5.22	5.33	.00 <i>n.s.</i>	5.24	5.31	.00 <i>n.s.</i>
9.	(b)	説明や指示を明確にできる	5.25	5.12	5.36	.02 **	5.12	5.35	.02 **
11.	(c)	教科書などを適切な発音で読める	5.22	5.07	5.36	.02 **	5.16	5.27	.01 *
19.	(d)①	わかりやすい授業が展開できる	5.12	5.01	5.22	.01 *	4.89	5.31	.02 ***
7.	(b)	他の教員と連携できる協調性がある	5.10	4.94	5.24	.02 ***	5.00	5.18	.01 **
8.	(b)	学習者のニーズを理解できる	5.05	4.94	5.14	.01 **	4.93	5.15	.01 **
6.	(b)	教育に対する情熱と熱意がある	5.04	4.94	5.13	.01 *	4.94	5.12	.01 *
1.	(a)	問題に対して柔軟に対応できる	5.00	4.93	5.07	.01 *	4.88	5.11	.01 *
5.	(a)	プラス志向である	5.00	4.86	5.13	.02 **	4.93	5.05	.01 *
20.	(d)①	生徒の興味・関心を引く話題や特技をもっている	5.00	4.90	5.09	.01 †	4.85	5.13	.01 *
12.	(c)	ALT とコミュニケーションができる	4.86	4.66	5.05	.03 ***	4.80	4.92	.01 *
21.	(d)②	生徒のニーズを分析し、授業の計画に役立てることができる	4.85	4.73	4.95	.01 *	4.65	5.01	.02 ***
4.	(a)	落ち着きがある	4.83	4.76	4.90	.01 *	4.76	4.90	.01 †
26.	(d)③	英語の語学的知識がある	4.79	4.71	4.87	.01 †	4.65	4.90	.01 *
13.	(c)	英語で授業ができる	4.76	4.67	4.84	.01 *	4.60	4.89	.01 **
22.	(d)②	学習者に応じて適切に教材を選択したり、補助教材を作成できる	4.76	4.66	4.86	.01 *	4.62	4.88	.01 **
23.	(d)②	学習者の英語学習に関する動機づけを喚起し、維持するのに有効な方法について知識があり、実践することができる	4.74	4.67	4.80	.00 <i>n.s.</i>	4.58	4.86	.01 *
29.	(d)③	コミュニケーション活動の指導法の知識がある	4.72	4.66	4.78	.00 <i>n.s.</i>	4.57	4.85	.01 *
17.	(d)①	授業の目的を適切に定めることができる	4.71	4.64	4.77	.00 †	4.53	4.86	.01 **
2.	(a)	好奇心が強い	4.66	4.62	4.70	.00 <i>n.s.</i>	4.67	4.65	.00 <i>n.s.</i>

番号	区分	質問項目文	全体 平均 <i>n</i> =611	男性 平均 <i>n</i> =290	女性 平均 <i>n</i> =321	性差の 効果量 η_p^2	若年層 平均 <i>n</i> =275	高齢層 平均 <i>n</i> =336	年齢層の 効果量 η_p^2
24.	(d)②	学習者が教室外でも自主的に学ぶために手助けできる方法を知っており、自律性を促進することができる	4.65	4.52	4.76	.01 *	4.55	4.73	.01 *
14.	(c)	学校文法を体系的に説明できる	4.59	4.53	4.64	.00 †	4.44	4.71	.01 **
18.	(d)①	授業に必要な補助教材やタスクを適切に作成できる	4.59	4.53	4.64	.00 <i>n.s.</i>	4.43	4.72	.01 *
25.	(d)③	学習指導要領についての知識がある	4.54	4.46	4.62	.00 <i>n.s.</i>	4.45	4.62	.01 †
33.	(d)④	国際語としての英語の役割を認識している	4.54	4.53	4.55	.00 <i>n.s.</i>	4.35	4.70	.01 **
28.	(d)③	4技能の指導法について知識と技術がある	4.50	4.44	4.55	.00 <i>n.s.</i>	4.36	4.62	.01 *
27.	(d)③	英語教授法・教授理論の知識がある	4.48	4.48	4.49	.00 <i>n.s.</i>	4.33	4.61	.01 *
30.	(d)③	英語のテストと評価の知識がある	4.46	4.42	4.49	.00 <i>n.s.</i>	4.30	4.59	.01 **
10.	(b)	教科外活動(部活など)に対する意欲がある	4.45	4.32	4.57	.01 †	4.53	4.39	.00 <i>n.s.</i>
32.	(d)④	異文化コミュニケーションの知識がある	4.44	4.31	4.55	.01 **	4.28	4.57	.01 **
31.	(d)④	英語圏文化の背景知識がある	4.40	4.31	4.48	.01 †	4.27	4.51	.01 *
34.	(d)④	国際情勢に関する知識と教養がある	4.32	4.30	4.35	.00 <i>n.s.</i>	4.16	4.46	.01 **
15.	(c)	大学入試センター試験の英語問題に正確な解答が出せる	4.16	4.13	4.19	.00 <i>n.s.</i>	4.08	4.23	.00 <i>n.s.</i>
16.	(c)	英検準1級、TOEFL550、TOEIC730以上である	3.86	3.78	3.93	.00 <i>n.s.</i>	3.76	3.94	.00 <i>n.s.</i>

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

3.3 子どもの属性別の分析結果

最後に、子どもの属性によって理想の教員像に違いが認められるか否かを検討するために、保護者と同様に、子どもの性別(男子、女子の2水準)および学年(1~6年生の6水準)を被験者間要因、資質・能力(34水準)を被験者内要因とする3要因混合計画の分散分析を行った。以降ではまず、子どもの性別要因について、その後、学年要因について検討していく。

まず、子どもの性別の主効果は認められなかった ($F(1, 599)=0.12, p=.728, \eta_p^2 = .00$)。すなわち、子どもの性別は平均的には理想の教員像に影響していなかった。一方、性別と資質・能力の交互作用が有意であった ($F(33, 19767)=2.54, p=.000, \eta_p^2 = .00$)。すなわち、資質・能力によって子どもの性別の影響は異なっていた。その効果量は小さいことに留意する必要があるものの、参考までにどの資質・能力においてとくに子どもの性別の影響が大きいのかを検討するため、項目別に子どもの性別の単純効果の検定を加えた。結果、「他の教員と連携できる協調性がある」($p=.0729, \eta_p^2 = .01$)でのみ有意傾向が認められ、男子を子どもにもつ保護者よりも、女子を子どもにもつ保護者の方が、平均値が高い傾向であった。その他の項目では子どもの性別の影響は検出されなかった。

同様に、子どもの学年要因の結果についてもみていく。学年の主効果は認められなかった ($F(5, 599)=0.63, p=.6788, \eta_p^2 = .01$)。また、子どもの学年と資質・能力の交互作用も認められなかった ($F(165, 19767)=0.88, p=.864, \eta_p^2 = .01$)。すなわち、子どもの学年は理想の教員像には影響していなかった。

概して、子どもの属性によっては、理想の教員像はさほど異なっていなかった。

4. 総合考察

本研究の目的は、2020年度から、小学校高学年で週2コマの教科「外国語(英語)」が始まることを踏まえ、小学校英語担当教員の資質・能力に着目し、保護者が小学校英語担当教員に求める資質・能力について明らかにすることであった。

結果、保護者が小学校英語担当教員にとくに求めている英語力は、突出して「適切な発音で読める」ことであることが明らかとなった。また、適切な発音で読んだり、ALTとコミュニケーションしたりする能力は、とくに女性の保護者において重視されていた。さらに、これらの英語力と同じ程度に、「明るい」「プラス志向である」といった(a)人格・性格の適性に関する項目や、「他の教員と連携できる協調性がある」等の(b)教職としての適性に関する項目も比較的高く評定されていたことから、「(1)教職としての資質・能力」も同程度に重視されているといえる。また、高齢層の保護者においては、若年層の保護者と比べると、(d)英語教授力についても、決して軽視しているわけではなかった。

保護者のニーズを尊重するならば、今後小学校英語担当教員がこれらの資質・能力を身につけられるよう研修体制の充実を図る必要がある。一方、発音以外の英語能力については、相対的にさほど重視されているわけではなかったという結果は、英語に自信のない小学校教諭の不安感や負担感を軽減しうると考えられる。とくに「英検準1級、TOEFL550、TOEIC730以上である」に対する全体平均値が34項目中最下位であった点は特筆すべきである。これらの結果を踏まえて、今後効果的な研修体制を構築していくことが期待される。

最後に、本研究の課題を2点述べる。

1点目は、現在の小学校英語担当教員が各資質・能力をどの程度身につけているのかが明らかにされていない点である。研修は、現在身につけている資質・能力と理想のギャップが大きいほどその優先度が高いといえる。もし、現在の小学校英語担当教員が平均的にすでに十分に適切な発音で読める状態であれば、一斉研修ではなく、苦手意識の強い教員だけが個別に行う任意研修で十分とも考えられる。今後このような現実とのギャップについて明らかにしていく必要がある。

2点目は、保護者の考える理想の教員像の妥当性である。保護者の考える理想的な教員が、必ずしも子どもの英語力を高めるとは限らない。したがって、今後、小学校英語担当教員の資質・能力によって子どもの英語力がどのように影響を受けるかについても、検討を進めていく必要がある。

付記

本論文は、日本児童英語教育学会第39回秋季研究大会にて発表した内容に加筆修正を加えたものである。

引用文献

- ベネッセ総合研究所・朝日新聞社(2018)。「学校教育に対する保護者の意識調査2018」 Retrieved from https://berd.benesse.jp/up_images/research/Hogosya_2018_web_all.pdf
- 岩永定・芝山明義・橋本洋治・岩城孝次(2004)。「保護者の学校教育に対する意識と学校関与意欲の関係：小・中学校の保護者調査を通して」『日本教育経営学会紀要』, 第46号, 52-64.
- 文部科学省(2016)。「3 小学校における英語教育に関する教育条件」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379941.htm
- 高木亜希子(2012)。「第5章：教師論」JACET教育問題研究会.(編). 新しい時代の英語科教育の基礎と実践——成長する英語教師を目指して——』東京：三修社.
- 山本達人(2015)。「学校教育に対する保護者の「教育意識」に関する実証研究の動向」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 第55巻, 139-148.